

滋賀・妙楽寺遺跡

みょうらくじ

- 1 所在地 滋賀県彦根市日夏町
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)四月～十一月
- 3 発掘機関 (財)滋賀県文化財保護協会
- 4 調査担当者 葛野泰樹・三宅 弘・稲垣正宏
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(彦根西部)

彦根市南部に独立丘陵の荒神山があり、地元では「荒神さん」としてあつい信仰をうけている。丘陵の西側は奈良時代の東大寺領覇

流荘に比定されているところであり、弥生時代には荒神山周辺に馬場遺跡をはじめ多くの集落が開発される。丘陵上には約二五基の後期古墳が存在し、中世になると山頂や尾根上に山城が築城される。現在その北側を宇曾川が琵琶湖にそいで

おり、この河川の復旧工事に関連して、一九八四年から一九八七年にかけて発掘調査を行った。

妙楽寺遺跡は弥生時代中期から室町時代末期にいたる複合遺跡で、特に室町時代末期の遺構としては道路、石組護岸を施した大小の水路と、水路に通じる階段や洗場、さらに礎石建物・掘立柱建物・井戸・石組柵などがあり、中国製陶磁器や信楽・美濃・瀬戸などの遺物が多量に出土している。これらは荒神山に築城された日夏城の山麓にひらけた町並であり、中世戦国期の生活を明らかにするものである。

木簡が出土したのは第二遺構面の溝からである。溝は南西から北東方向にのびる幅約5m、深さ約1mの素掘溝で、中位層(有機質土層)から呪符木簡二点と板塔婆一枚が出土したが、板塔婆には墨痕は認められなかった。伴出遺物には土師器皿数点と箸状木製品約一八〇本がある。他に南側にあるほぼ同規模の溝から、片面に墨書をした板塔婆が一点出土した。

第二遺構面は礎石建物・掘立柱建物・井戸・石組柵・溝などで構成され、鎌倉時代から室町時代中頃に比定される。木簡の出土した溝は石組柵で切られており、伴出遺物などから鎌倉時代末期から室町時代初頭頃とみられる。

8 木簡の釈文・内容

出土した木簡の中で、墨痕の認められるのは呪符木簡八点と板塔

婆一枚の合計九点である。

- (1) ・
 「(符籙)急々如律令」
 300×28×3 051
- (2) 「 (符籙)急々如律令」
 (239)×33×3 051
- (3) ・
 「(急々カ)律令」
 (245)×21×3 081
- (4) ・天罡(符籙)急々如律令
 ・
 「(物忌カ)」
 (139)×26×2 081
- (5) 「(梵字)天罡(符籙)急々」
 (133)×30×3 019
- (6) ・「(梵字)天」
 「(聖カ)物忌」
 (236)×26×3 019
- (7) ・「(梵字)」
 「物忌」
 (124)×24×4 019

- (8) ・「(梵字)天罡(符籙)急々如律」
 ・「物忌」
 (131)×21×3 019

呪符木簡の形態は、長方形の材の頭部を圭頭にして下端を尖らせ
 たものと、そうでないものがあり、下端の欠失するものが多い。(3)
 ・(6)・(7)の裏面中央には「物忌」とだけ墨書し、(4)・(8)も「物忌」
 とみてよいであろう。このことから、(3)・(4)・(6)・(7)・(8)は「物忌
 札」といえる。梵字の判読は困難であるが、(5)は大日如来か不動明
 王種子の可能性がある。(1)・(4)・(5)・(6)・(8)は「急々如律令」と符
 籙とを組み合せており、(5)・(6)・(8)は梵字を上配している。さら
 に、この三点には「天罡」を配し、(6)・(8)には「物忌」と墨書して
 いる。これらの組み合わせは、妙楽寺遺跡出土の呪符木簡の性格を明
 らかにするものとして注目される。

板塔婆(次頁図(9))は頭部を圭頭にし、左右に二カ所ずつの切り込
 みを入れ、下端を尖らす。墨書は片面にのみ認められるが、大部分
 は消えている。わずかに文字痕が推定四行にわたってみられる。

木簡解読にあたっては赤外線カメラを使用し、奈良国立文化財研
 究所の綾村宏氏のご教示を得た。

(葛野泰樹)



(4)



(3)



(2)

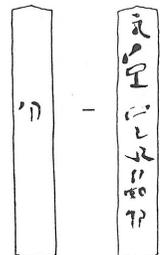
(1)



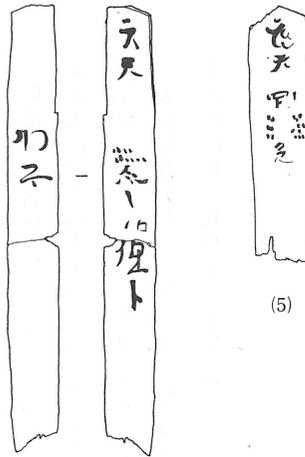
(9)



(7)



(8)



(6)



(5)

